

平成18年7月25日発行 (毎月1回 25日発行 No.106)

RHSJ

The Japan Branch of
The Royal Horticultural Society



英国王立園芸協会日本支部



The Pineapple Plant

of the Pineapple Plant

2006

8



チェルシー・フラワーショウ2006 <後編>

花模様、人模様……

チェルシーからのメッセージ

写真・文：青山知花

色鮮やかな花、めずらしい品種。斬新なガーデンデザイン。園芸を楽しむ人々にとってチェルシー・フラワーショウは情報を集めインスピレーションを得る大切な場所になっている。一方、スポーツを競うオリンピックが平和の祭典であるように、チェルシーも世界の人々が植物と庭を囲んで理解を深める祭典になっているように思われる。丹誠込めて作り上げられた展示にはその出展者の意図があり、それらを深く知ることでチェルシーの魅力はより広がっていく。後編では、展示やチェルシーで関わる人々を通じて発信されるさまざまなメッセージに耳を傾けてみたい。



2つのガーデンに見る環境への心遣い

環境問題は、RHS 本部がさまざまな形で取り組んでいるが、ここに上げる2つのショウガーデンは私たちに環境問題の多面性と自然保護の課題を投げかけている。

バリー・メイレッド氏と昨年RHSJ で講義をされた二宮孝嗣氏がコラボレーションしている「ロックウール・ガーデン・ルーム」は、建築家出身であるメイレッド氏らしくさまざまなコンセプトが詰まっている。英国では近年、コンサーヴァトリー(住宅型温室)の増築が、植物を育てるだけでなく外の景色を取り入れたリビングルームとして人気が集まっている。残念なことに、多くをガラスに囲まれ気密性に欠けるコンサーヴァトリーは暖冷房効率が悪く、地球資源の無駄遣いになっているということだ。

メイレッド氏はこの本末転倒とも思われる状況を見据えて住宅と庭の新しいあり方を提案している。(写真下)

花模様 むらさき色々

毎年チェルシーでは、市場の流行を先取りした形で展示が行われるが、花の色やカラーコーディネーションもそのひとつである。ここ数年、パープル系は好まれて使われてきたがその傾向が本年はより顕著であった。デザインでは多様性を示していたショウ・ガーデンであったが、ほとんどの庭でパープル系の花を中心に、同系色であるピンク、ワインレッドやブルーというカラーコーディネーションであった。写真中央はリーズ地方自治体・ガーデン(Leeds City Council Garden)の例。ガラスを積み上げて作られた透明感のある薄緑色を背景に青紫のアイリスとオレンジのユーフォルビアが引き立つ効果を作っていた。植物の種類では、アイリスや、パープル、ピンク色の多いアリウムが多く見かけられた。

The Rockwool Garden Room by Barry Mayled

ロックウール・ガーデン・ルーム (ブロンズ・フローラ・メダル)

1 庭の全景。中央の噴水を囲む形で右手と奥手に白、紫、ピンクの静かな色合いの植栽がされている。左手にはコンサーヴァトリーの代わりに提案されたガーデンルームとテラス、その上にルーフガーデンがある(これらは住居に繋がっている)。各種建築材料には自然素材ながら気密性に優れ、環境に負担をかけないものが使用されている。





2



3

次に紹介するのは 米国シカゴのミシガン湖周辺の生態系を庭として再現した「峡谷ガーデン——氷河の贈物ガーデン」。氷河期後期の温暖化によって作り出された峡谷の自然を通じて、現在の地球が抱える温暖化の問題や自然保護の立場を訴えようとしている。

もう一つの特徴は会期後、ロンドンのギボンズ公園 (Gibbons Park) へ移設されること。この庭は幸運にも移設の機会を得ることができたが、移設プロジェクトは想像以上に難関が多い。前出のメイレッド氏によれば単純に解体する工事と比べ移設作業費用は5倍近くになり、今回は断念せざるを得なかったとのこと。移設するためには、移動などに耐える部材の強度が必要になる他、会場からの撤去が2日間に限られるため、人海戦術で対応せざるを得ないコストが生じる。地球環境の見地から考えれば、労力と費用をかけて作られたショウ・ガーデンやスモールガーデンの第2の住処を見つけることは限りある資源の有効活用であり、このような企画をサポートする体制が整っていくことが望まれる。



Ravine Garden : Gift of the Glacier by Catharina Malmberg-Snodgrass

「峡谷ガーデン—氷河の贈物」ガーデン
(シルバーギルド・フローラ・メダル)

5 氷河から溶け出して湖に流れ込む水と峡谷に自生している希少な植物を植栽し、生態系として表現している。



4

The Rockwool Garden Room by Barry Mayled

2 テラス横の開口部からガーデンルームと庭を望む。ガーデンルームは庭に続く居間としてデザインされており、庇のあるテラス部分には、バーベキューの施設などが整っている。住居からガーデンルーム、そしてテラスから庭へとスムーズに導かれるようになっている。

3 二宮氏と彼が率いる日本人チーム。彼らの勤勉な働きぶり丁寧な植栽は、チェルシーの関係者も毎年注目している。英国での経験も多く園芸関係者のネットワークを持っている二宮氏によれば、植栽用植物の見積もりは実際に植えてみないと分からない部分もあり予測が難しいとのこと。それ故苦労は皆同じということもあり、設営期間中には過不足を補うために出展者同士協力して、植物を交換し合ったりするという。微笑ましいエピソードである。

4 ルーフガーデンの一部はバルコニーのように庭に向かって突き出し、階下の庇の役も担っていて庭も俯瞰でき、とても開放感がある。このルーフガーデンは省エネにも貢献でき雨水の有効活用もできる。



5



6



7



8

6 森の木々に囲まれて育つ草花と共にコケや落ち葉まで持ち込み、まるでミシガン湖周辺の峡谷がそのまま切り取られてきたように見える。

7 チェルシー出展者の大きな悩みの一つに、会期中に花を良い状態に咲かせることがある。蕾でも、咲き過ぎでもない状態が理想だが、気候や生態系の違う地域から運ばれてくるため調整は難しい。シカゴからロンドンへ移され

た花々は開花時期を過ぎていたため、開花を遅らせるのに大変苦労したとのこと。写真はアツモリソウ属。

8 木々の高さを生かし日本の高原を彷彿させるすがすがしいデザイン。角地を生かした起伏状の庭は2方向から高台に登れる。こちらは正面側の石畳と中央奥に設けられた氷河をイメージしたガラスの彫刻。

チェルシー 人模様

チェルシーにはさまざまな職種の人々が集まってくる。たとえば、ショウ・ガーデンの関係者には、クライアント（発注者）、ガーデンデザイナー、設営請負業者、栽培農家と業者、スポンサーなどがある。クライアントは、保険会社や新聞会社、酒造メーカー、各国政府や地方自治体、そしてNGO などさまざま。デザイナーたちは自らのスタイルを生かしながら、クライアントが一般の人々に伝えたいメッセージを庭のデザインに織り込んでいく。美しい庭や植物の展示を支える人々の姿を追ってみた。

➡ 雨天決行

英国では植物や庭の写真を専門に撮る園芸写真家が活躍しており、チェルシーでも彼らの姿が多く見られる。会場が正式にオープンすると人混みなどで写真が撮りにくくなるため、写真家達は設営期間中、雨天や曇天でも早朝から毎日会場につめ晴間を待ち構えている。写真は審査が行われるプレスデーの様子。英国の園芸写真家らのトレードマークは機材を旅行用キャリーバックで運び、脚立を利用して庭の俯瞰を捉える姿。そんな彼らが撮った写真の多くは「The Garden」など主要な園芸雑誌や書籍に掲載されている。



➡ ラストスパート

本年は、3週間半の設営準備期間が長雨や強風にみまわれ、屋外のショウガーデンの作業は特に遅れた。審査前日には泊まり込みや早朝出勤でぎりぎりまで仕上げ作業に追われていた。

➡ 土足厳禁

設営期間の会場は、大きなクレーンやトラックが頻繁に行き交い、植栽を待つ植物が立ち並ぶため、ぬかるみで足場は非常に悪い。履いている靴は泥だらけになっていく。そんなわけで展示作業の現場では最後の仕上げが近づくにつれ「土足厳禁」区画が増え、日本とは違い屋内で靴を脱ぐ機会の少ない英国の人々も、靴を脱いで作業をする姿が良く見られる。



◆ 最終日の熱気

グレートバピリオン内(屋内展示)に参加した西南部デヴォン州にあるRHS ローズムーア・ガーデン。RHS 内部からの参加のため受賞対象にはなれなかったが、審査員からゴールド・メダルに値すると評された。写真はチェルシー名物、最終日の「セルオフ」の様子。展示された多くの植物が破格の値段で売り出されるが、RHS お膝元で育てられた良質の植物を求めようと大変な人気を集めていた。

◆ ニュージーランド式挨拶

ニュージーランド観光局が自国の魅力をアピールするために原産の植物を3,000種類も集めて作った、その名も「ニュージーランド100%ガーデン」。こちらは公式行事でRHS会長リチャード・カルー・ボール卿がニュージーランドの関係者と友好の挨拶をしている所。リチャード卿にとって5年間務められた会長職、最後のチェルシーとなった。

◆ 雨にもめげず

雨の多かった今年のチェルシーは来場者も大変だった模様。最終日4時に始まるセルオフ(展示植物の即売)から閉場まで強い雨が降り続いたが、そんなことにはめげず思い思いの工夫をしながら大きな鉢植えから切り花まで持ち帰る姿が印象的だった。

©Tomoca Aoyama



◆ 若き挑戦者

シティ・ガーデン部門に参加したイアン・ロッチェット氏は弱冠20歳。スポンサーも付けずに自力でチェルシーに初参加。都市生活者のための憩いの庭(The City Worker's Retreat by Ian Rothead)をデザインし、シルバー・フローラ・メダルを渡され感慨深げ。限られた資金で世界のチェルシーに挑んだ彼のチャレンジ精神にエールを贈りたい。